中国語と私

横田恭三

私の中国語との出会いは、実のところかなり古い。が、基礎をないがしろにした自己流に終始したため上達は望むべくもなく、本格的な学習の機会を持たないまま、時だけがむなしく過ぎ去った。

今から八年前、北京で初めて開催された第一回中日書法史論国際研討会に書学書道史学会の一員として参加した。日本からの研究者は二十人ほどで、そのうち私と同年代の参加者は四、五人いたが、彼らはいずれも留学経験があって流暢に中国語を使いこなし、中国や台湾の研究者らと交流を深めていた。会話らしい会話にならなかった私は、このときほど口惜しい思いをしたことはなかった。帰国後まもなく、中国語教室の記事が掲載されている新聞を目にし、即座に電話した。以後、週一回のレッスンをほとんど休まず四年ほど通った。このころから毎年のように中国へ出かける機会に恵まれ、一人旅にも果敢に挑戦した。

◇

こんな苦い体験がある。雲南省へ旅行したときのことである。昆明市内でタクシーに乗った。運転手は私が日本人であることを知ると、「日本的インシャン很好！（日本のインシャンはとてもよい）」と話しかけてきた。私は、「インシャン＝印象」だから、「你为什么有对日本的インシャン？　你来过日本吗？（あなたはなぜ日本に対して印象を持っているのですか？　あなたは日本に来たことがあるんですか？）」と聞き返し、二、三回やりとりした。が、こちらの問いかけに対して運転手は訝しそうな顔をするばかりであった。私は「四時春の如し」といわれる昆明を褒め称えるつもりで「我对昆明的インシャン也很好！（昆明のインシャンもとてもいい！）」と言うと、彼は「昆明的インシャン？　绝对没有。你说的不对。我们的公司去年买了日本的インシャン。声音很好、设计也好（昆明のインシャン？あり得ない。あなたの言っていることは間違っています。我々

の会社は去年、日本のインシャンを買いました。音もデザインもいいですね）」そこで初めてインシャンは「音箱＝ステレオ」のことだと気付いた。漢字ではそれぞれ「印象」「音箱」と書く。どちらも発音はインシャンで同じだが、音の高低が違う。つまり、四声が違うのである。にもかかわらずてっきり「印象」だと思い込んでしまった。四声の聞き分けがいかに大切か思い知らされた。

また、こんな話もある。以前、中国では夏季にサマータイム制を実施していた。通常より時刻を一時間早めるため、日本との時差がなくなる。ある年の夏、私は単身で上海に一泊し、翌日の午後、国内便で湖南省長沙市へ向かい、日本の某書道団体と合流する予定であった。翌朝、上海の街を散策したあと、古籍書店で買い物をし、その書籍を日本へ郵送してもらった。が、その手続きに手間取り、フライトまでの時間にあまり余裕がないことに気付いた。急いでホテルに戻りタクシーに乗り込んだ。長沙行きの出発まであと一時間ほどしかない。運転手に空港までどのくらいかかるのかと尋ねると、混雑しているので一時間近くかかるという。出来るだけ速くと頼む。運転手が何時の便かと尋ねてきたので、二時半だと答えると、「没问题（だいじょうぶ）」だと言った。しかし、道路は予想通り混雑していて空港に到着したのは二時を過ぎていた。この便に搭乗できなければ航空券が無駄になるばかりか、長沙で合流する方々に迷惑をかけることになる。慌てた。夢中で手続きを済ませ搭乗ゲートに走った。時計は限りなく出発時間に近づいていた。ゲートは大勢の人でごった返していた。搭乗案内板に「長沙」の文字が見あたらない。万事休すか。構内放送に耳を傾けると二時出発の便の搭乗開始をアナウンスしていた。不思議に思った。今二時半になろうとしているのに、なぜ二時の便をアナウンスするのか。五感を使ってあらゆる情報を収集しようとしたが、冷静さを失った頭はとうに混乱していた。このとき何気なく隣に坐っている人の時計の文字盤が一時半をさしているように見えた。思わず尋ねた。「请问、现在几点钟？（お尋ねします。今何時ですか？）」「现在？一点半左右。（今？　一時半前後だよ。）」…。

サマータイム制がその年から廃止されていたことを知らなかったのである。最新の情報をチェックしておかねばならないことを痛感させられた。

◇

新中国建国後五〇余年を経た。この間、中国は四つの近代化を標榜して国力の充実を図り、一国二制度なる奇策をもって香港と澳門（マカオ）を返還に導いた。中国全土が古代の歴史の宝庫であり、土を掘り起こせば必ずといってよいほど古代の遺物に遭遇する。出土する文字史料によって、これまでベールに包まれていた書体の変遷、とりわけ篆書から隷書への変遷がか

なり明らかになってきた。

中国の発掘情報をいち早く知る方法にインターネットの活用が挙げられる。例えば、「中国文物報」は一、二週間に一度くらいの割合でまめにチェックすれば最新の情報が得られる。近年はインターネットの急速な進歩に伴い、中国の若手研究者はたいていEメールアドレスを持っており、パソコンを使いこなすことができる。もし現地の研究者と面識があって中国語を打ち込める環境にあるならば、Eメールを通じて交流することも可能となる。私の中国語を学ぶ楽しみはこんなところにもあるといえる。

◇

欧米人と比較して日本人は漢字を知っている分だけ中国語を学ぶのに有利であろうと考えられがちだが、果たしてそうであろうか。答えは「不是（いいえ）」である。その理由は、一つには文の構造がS＋V＋O＋Cであること。二つ目には日本語にない発音が多いこと。例えばピンインでいうLとRの違いがあることや、そり舌音と呼ばれる特殊なものがあって、日本人にとってはかなり厄介である。三つ目には有気音と無気音の使い分けが必要であること。中国には清音濁音の区別がないかわりにこの有気音無気音の区別がある。有気音とは「気がはっきりと出る音＝破裂音」と理解してよい。日本人はかなり意識的に発音しないと差が出にくい。ある中国人から、来日当初「中野」と「長野」をよく聞き違えたという話を聞いたことがある。我々日本人はあまり意識したことがないのだが、日本語を学ぶ中国人に清音濁音の違いを区別させるとき、前者を有気音、後者を無気音にして発音するように教えると分かりやすいという。が、そのように発音された言葉を実際に聞いてみると、それだけでは不十分である。ところで、学びやすい点もある。欧米の言語に比べて時制にはあまりうるさくないことである。一般的にはセンテンスの前後にある語から過去か現在かを判断すればよい。また、漢字の配列順序で意味に違いが生じるが、単語そのものの語尾変化はない。以上が、中国語を実際に学んでみた私の個人的な感想である。

◇

書と書の文化、漢文、中国語、これらは言うまでもなく密接な関係がある。私における語学の醍醐味と言えば、書学研究を通して展開される現地の人々との交流であろう。通訳なしで言葉を交わし、相互に解り合えたときは何ともいえない喜びがある。私の中国語のレベルはけっして高いとはいえず、ここに紹介したような失敗談は数えきれないほどあるが、これからも積極的に中国を訪問してフィールドワークを重ね、現地の研究者と交流を持ち、書の歴史を再構築していきたいと考えている。慌てず焦らず。「不怕慢、就怕站（ゆっくりなことを恐れるな。立ち止まることを恐れよ）」である。